参加アーティスト

アブドラ・アル・サーディ
Abdullah AL SAADI

1967年コア・ファックカーン（アラブ首長国連邦）生まれ／コア・ファックカーン（アラブ首長国連邦）拠点

地元の大学で英文学を学び、1994年から1996年まで京都精華大学で絵画を学んだ。絵画、ドローイング、長大なノートブックの制作、そして自らが見つけてきたさまざまなオブジェの収集とその体系的な分類、さらには新しい文字の発明と、彼の制作は多岐にわたる。自然や地方での生活への強い関心が、移り変わる環境を観察することと、個人的でありながら文化に関わる歴史を探求しようとする作家の制作活動に影響を与えている。国内外の多くの展覧会で発表しているが、主なものに、シャルジャ・ビエンナーレ（アラブ首長国連邦、2003、2011、2015）や第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ・アラブ首長国連邦館代表（2011）がある。

《The Comparative Journey, The Watermelon Series》展示風景
「Abdullah Al Saadi: Al-Toubay」Sharjah Art Foundation　2014
photo: Alfredo Rubio　Courtesy of Sharjah Art Foundation

追加情報

アーキテクツ・オブ・エアー
Architects of Air

1992年ノッティンガム（英国）にて設立／ノッティンガム（英国）拠点

創立者でデザイナーのアラン・パーキンソンは1980年代に空間芸術の創作を開始。1985年には、内部に入って鑑賞できる空間芸術作品「ルミナリウム」を発表した。コンセプトは、光と色彩によってデザインされた空間芸術の内部で美的な感覚を研ぎ澄まし、驚きと不思議に満ちた感動を体験することにある。デザインは、イスラム美術やゴシック建築、現代建築などに着想を得ている。今日まで21におよぶ「ルミナリウム」を創作、40を超える国々で公開され、大きな成功をおさめている。あいちトリエンナーレ2016では、五角形の幾何学美をモチーフとする「ペンタルム」を展示予定。

《ペンタルム》　2013　photo: Alan Parkinson

追加情報

ノミン・ボルド
Nomin BOLD

1982年ウランバートル（モンゴル）生まれ／ウランバートル（モンゴル）拠点

ノミンは今日的な問題に言及するために、モンゴル人の美学および、古代宗教と皇帝制度のもとで制作されてきた仏教美術を用いる。彼女は伝統的な画法を学び、考古学的な発見物と神々の入り組んだイメージを画面において結合させる作品でそのキャリアをスタートさせた。現在では、象徴的な色と形を使って日常の価値観を問う作品を制作している。そうした絵画において、人々を世俗から神々の世界へと配置することによって、富、政治、自然そして人間関係といった主題を考察する。現代の因習を取り払うこと、そして鑑賞者にモンゴルの古代の歴史の上に立った視点で文化規範を見つめ直すよう促すことが、彼女の制作の目的である。

《Earth》　2015　Courtesy of the artist

追加情報

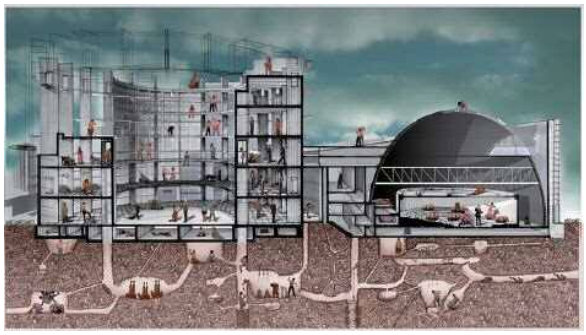
カワヤン・デ・ギア
Kawayan DE GUIA

1979年バギオ（フィリピン）生まれ／バギオ（フィリピン）拠点

デ・ギアは、絵画、インスタレーション、彫刻と幅広く作品を制作している。彼の作品は、現代のフィリピンまた過去の植民地時代における社会政治的な問題に対する、皮肉めいた、時にコミカルな見方を提示する。また、しばしば自身の故郷について言及したり、題材として描いたりしている。彼がコルディリェラ山系の遺産と土着の文化に深い関心を寄せるのは、家族がバギオでの芸術や文化活動を、長年にわたって擁護してきたからである。芸術は排他的ではなく、それゆえ制度の規範の外にあるという信念をよりどころに、デ・ギアは2011年、「AX（iS）アートプロジェクト」というビエンナーレを創設した。

《Trojan Horse》　2011　Courtesy of the artist

追加情報



インジ・エヴィネル
İnci EVINER

1956 年アンカラ（トルコ）生まれ／イスタンブール（トルコ）拠点

ドローイングやビデオ作品から、パフォーマンスを伴うもの、グループで制作するものまで、エヴィネルが作り出す大規模な作品は、実はドローイングを出発点とし、その重ね合わせから成立している。彼女は作品を通して、欲望や災害、空間、主観性が持つ政治性とその潜在性を探求している。一人のアーティストとして、この私たちが身に感じ、新たに耳をそばだてることや注視することを求めてくるトラウマに自覚的であろうとする。彼女は女性の身体に及ぶ権力の現状を探りだし、外から押し付けられ、常に発動した状態にある、そうしたアイデンティティの外側へと向かおうとしている。

《Parliament》　2010　Courtesy of the artist

追加情報

グリナラ・カスマリエワ & ムラトベック・ジュマリエフ
Gulnara KASMALIEVA & Muratbek DJUMALIEV

1998年ビシュケク（キルギス共和国）にて共同制作開始／ビシュケク（キルギス共和国）拠点

中央アジアのキルギスの伝統的な遊牧民の暮らしのうえに、旧ソビエトによる共産主義時代を経て、現在はグローバル資本主義に翻弄される激しい変化の最中にある地で暮らす人々の政治的にも経済的にも厳しい現実を、写真、映像やパフォーマンスなどにより捉える。キルギスを抜けて中国へとつながるシルクロードの現在の様子を捉えた作品群は、彼らを取り巻く環境がもたらす懐疑や失望への苦闘の様子を、ミニマルで詩的な物語構造と、音楽を効果的に組み合わせることにより、厳しくも美しく描き出す。首都ビシュケクでアートイースト・アートセンターを運営するなど、キュレーションや芸術教育、アーティストサポートにも注力している。

《A New Silk Road: Algorithm of Survival and Hope》　2006　Courtesy of the artist

追加情報

タロイ・ハヴィニ
Taloi HAVINI

1981年アラワ（パプアニューギニア）生まれ／ブカ島（パプアニューギニア）、メルボルン、シドニー（オーストラリア）拠点

ハヴィニの作品は、場所が持つ政治性に関わる。そして、先住民族の知の体系が世代間で受け継がれることにも関わっている。この継承は収集すること、記録すること、そしてオセアニア内の彼女の故郷の文化実践者と交流することを通して行われている。彼女の仕事は写真、版画、ビデオ、陶芸、インスタレーションと多岐にわたり、またメラネシアとオーストラリアにおける文化的遺産に関わるプロジェクトや展覧会、そしてその地域のコミュニティ発展にも積極的に携わる。2002年以来、オーストラリアをはじめアジア・太平洋地域で発表している。近年では「Meleponi Pasifika」（ジョグジャカルタ、インドネシア、2014）、第8回アジア・パシフィック・トリエンナーレ（ブリスベン、オーストラリア、2015）などに参加。

《Beroana》展示風景　「Primavera」シドニー現代美術館　2015
Courtesy of Museum of Contemporary Art, Sydney

追加情報

今村 文
IMAMURA Fumi

1982年愛知県生まれ／愛知県拠点

愛知県長久手市で制作を続ける。今村が自らの表現技法として取り組んでいるのが、エンコースティック（蜜蝋画）である。この技法は、古代エジプトのミイラの棺の装飾にも使われていた古代の技法で、色の顔料を温めたロウの液体で板のパネルへと固着させていく、極めて時間のかかる技法である。この方法を用いて、今村は花や葉などのモチーフのパターンをパネル全面に埋め尽くすようにして塗り込める。このことで、近代の油彩や現代のアクリル絵の具が作り出す表面とは異なる、鑑賞者を幻惑するような視覚的な効果を与えている。

《ぱらとぷどう》部分　2014　Courtesy of the artist

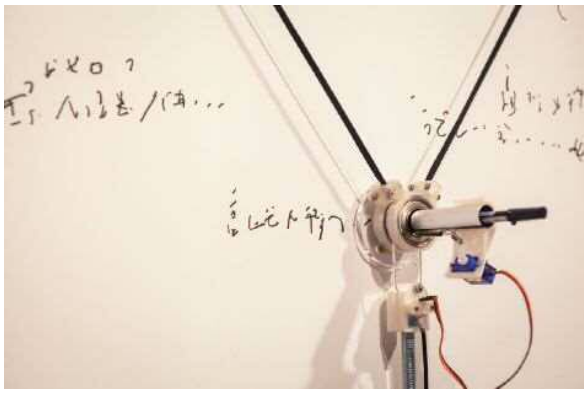
追加情報

イマン・アイッサ
Iman ISSA

1979年カイロ（エジプト）生まれ／カイロ（エジプト）、ニューヨーク（米国）拠点
さまざまな素材を用いて、物質や歴史、そして言語の間に起こる相互作用について探求している。あいちトリエンナーレでは、2015年から制作を続けるシリーズ「Heritage Studies（遺産研究）」の新作群を発表予定。これらの作品においては、現在と結びつく歴史的な美術品を再解釈して作り直し、もとの美術品を説明するテキストと対にして展示する。言葉とオブジェクトをつなぎ合わせること、そして博物館的な陳列方法と展覧会の仕様でオブジェクトと形に語らせていく点が、アイッサの仕事に共通する特色である。近年では Pérez Art Museum（マイアミ）、バルセロナ現代美術館での展示、第8回ベルリン・ビエンナーレ（2014）の参加などがある。

《Heritage Studies #9》展示風景
「Iman Issa: Heritage Studies」Pérez Art Museum、マイアミ　2015
photo: STUDIO LHOOQ　Courtesy of the artist and Rodeo

追加情報



菅野 創＋やんツー
KANNO So + yang02

2011年より共同制作開始
やんツーは、デジタルメディアを基盤に、グラフィティやストリートアートなど公共の場における表現にインスパイアされた作品を制作している。デバイスやソフトウェアを使用し作品の形態にとらわれることなく、常態化された概念を疑い、既存の価値観を問う。菅野は、テクノロジーを駆使しながら、シグナルとノイズの関係、エラーやグリッチといったテクノロジー特有の事象に注目し、作品を制作する。2011年に、二重振り子の動きを利用してスプレーによって抽象的なラインを描画するドローイングマシーン《SENSELESS DRAWING BOT》を共同制作し、第15回文化庁メディア芸術祭アート部門で新人賞受賞。以後メディアシティソウル2012や札幌国際芸術際2014でもドローイングマシーンを発表している。

《センスレス・ドローイング・モジュールズ #2 - レターズ》　2015　photo: 宮脇慎太郎

追加情報

ハッサン・ハーン
Hassan KHAN

1975年ロンドン（英国）生まれ／カイロ（エジプト）拠点
アーティストであり音楽家でもあるハーンは、サウンド、テキスト、オブジェクトや空間、状況などから、この世界への応答としてのかたちを生み出そうとする。長期にわたる彼の実践の中で、ハーンはイメージとサウンドの構築と脱構築、この両者の並置を通して、彼独自の作品言語を作り上げてきている。主な展覧会に、フランクフルト近代美術館（2015）、Downtown Contemporary Arts Festival Egypt（カイロ、2014）、ドクメンタ13（カッセル、ドイツ、2012）、をはじめ、サンパウロ、イスタンブール、北九州、ドーハなど世界各地で展覧会を行っている。

《DOM-TAK-TAK-DOM-TAK》展示風景　SALT Beyoğlu、イスタンブール　2012
photo: Serkan Taycan　Courtesy of the artist and Galerie Chantal Crousel, Paris

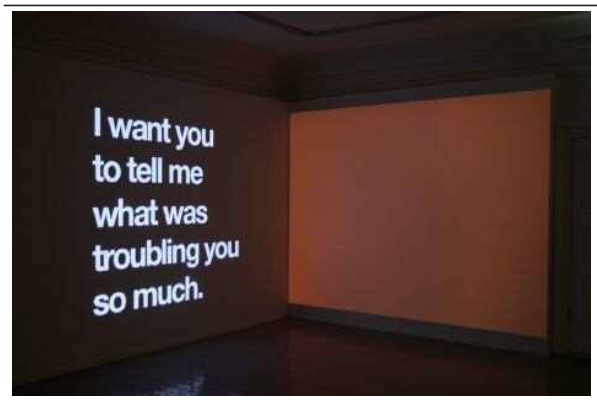
追加情報

チェルシー・ナイト with ニック・ハレット、マシュー・ポール・ジンクス、クリスティン・サン・キム、ライアン・トレイシー
Chelsea KNIGHT with Nick HALLETT, Mathew Paul JINKS, Christine Sun KIM and Ryan TRACY

1976年バーモント州（米国）生まれ／ニューヨーク（米国）拠点
ビデオ、パフォーマンスアーティスト。ナイトの作品は、社会の中の人種やジェンダー、政治といった折れ目、それらがもたらす役割演技を対象としている。あいちトリエンナーレ2016で展示予定の《Fall to Earth》は、ナイトがサウンド・アーティストであり作曲家でもあるマシュー・ポール・ジンクス、ライアン・トレーシー、ニック・ハレット、クリスティン・サン・キムらと共同で制作してきた作品である。これまでの個展、パフォーマンスに、ニュー・ミュージアム（ニューヨーク）、セントルイス美術館（ミズーリ州）、ブルックリン美術館などがある。

《Fall to Earth》　2015　Courtesy of the artist

追加情報



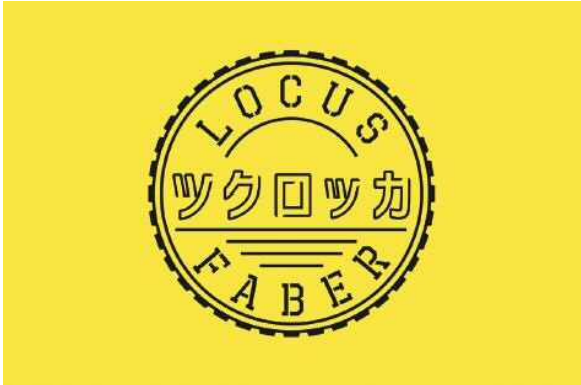
イグナス・クルングレヴィチュス
Ignas KRUNGLEVIČIUS

1979年カウナス（リトアニア）生まれ／オスロ（ノルウェー）拠点

ノルウェー国立音楽アカデミーで作曲を学ぶ。クルングレヴィチュスの作品は、視覚芸術と音楽の間を行き来しながら、権力の心理やさまざまなテクノロジーによるデバイスがもつ政治的側面を探究しようとする。主に音響的かつ視覚的なインスタレーションや、音またはビデオによるプロジェクトを発表している。これまでに、第12回ハバナ・ビエンナーレ（キューバ、2015）、第14回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展・ノルウェー館（2014）、クラクフ現代美術館（ポーランド）、第19回シドニー・ビエンナーレ（2014）などに参加、オスロでの発表も多い。

《INTERROGATION》展示風景　Oslo Kunstforening、ノルウェー　2009
photo: Ignas Krunglevičius

追加情報



LOCUS FABER ツクロッカ
LOCUS FABER TSUKULOCCA

2015年愛知県にて始動／愛知県拠点

2015年8月より、アートラボあいち大津橋3階にあるスペースを拠点に、一般の人を対象にして近年大きく進化したデジタル技術を活用し、自由に創作するプログラム「LOCUS FABER ツクロッカ」を実施してきた。この「ツクロッカ」を運営してきたメディアアーティスト河村陽介をプロジェクトリーダーにして、やんツー＋石毛健太、堀尾寛太、キム・フニダ（韓国）の3組のアーティストをゲストに迎え「動き」「音」「光」をキーワードに、一般向けのワークショップを継続して開催する。こうしたワークショップの活動によって、作品制作のアイデアをグループで共有して、ワークショップの参加者自らが作り上げる作品を一つの空間に結合させる。

追加情報

マーク・マンダース
Mark MANDERS

1968年フォルケル（オランダ）生まれ／ロンセ（ベルギー）拠点

人、動物、家具などのモチーフで緩やかに空間が構成される。そこでは、かつてそこにあったもの、あるいは生きていたもの、動いていたものを、形態として残すことを出発点とする彫刻が内包しているように思える、死と静止そして不在との関係が見事に示されている。また、中間的な状態も同時に多重的に示されることで、生と死、動と静、生き物と彫刻、さらには彫刻と自分の間で宙吊りとなってしまった時間や状態も示されていき、制作者、つまりは創造者のアトリエに迷いこんでしまったような感覚が作り出され、鑑賞者を困惑させながら魅了する。

《Room with Unfired Clay Figure》　2014　photo: Peter Cox
©Mark Manders / Courtesy of Zeno X Gallery, Antwerp

追加情報

ヨルネル・マルティネス
Yornel MARTÍNEZ

1981年マンサニーリョ（キューバ）生まれ／ハバナ（キューバ）拠点

ヨルネルは多くの事柄を参照しつつ、ドローイングからインスタレーションに至るまで幅広く制作を展開している。ポストコンセプチュアルアートの影響が強く、テキストと詩を用いて作品を組み立てることが多い。共同プロジェクト「P350」のコーディネーターでもあり、シェアスペースをオープンし、冊子上のみならず、展覧会、リーディング、ワークショップ、公共の場所での取り組みを通して、人と協同することを推し進めることで、ライター、詩人、アーティストやクリエーターたちの実験的発表のためのプラットフォーム作りに取り組む。不用になったセメント袋で作られた雑誌は販売を目的とせず、編集作業の核となるシリーズ性、制作、流通網、そして編集会議のあり方などを問題としながら、人の手のみを介して流通していく。第12回ハバナ・ビエンナーレ（2015）をはじめ国内外で発表。

「P350」プロジェクト風景　2014–2015　Courtesy of the artist

追加情報

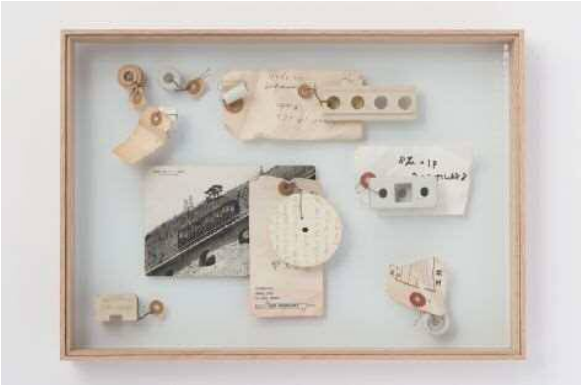
アドリアナ・ミノリーティ
Adriana MINOLITI

1980年ブエノスアイレス(アルゼンチン)生まれ／ブエノスアイレス(アルゼンチン)拠点

ミノリーティは、建築、デザイン、視覚芸術などの要素を結びつけながら、エロティシズムと抽象の間にある、政治的で歴史の記述化に関するつながりを明らかにしようとする。クイア理論とフェミニスト理論に通じた彼女の絵画やインスタレーションでは、精神的な価値と美学的な評価とが混合しながら、ジェンダーの問題が視覚的に取り扱われている。そこでは、人間の身体と幾何学的なかたちは同じようにしてポルノ的エロティックな欲望を引き受けている。これまでに第10回メルコスール・ビエンナーレ（ポルト・アレグレ、ブラジル、2015）、モントリオール現代美術館、ブルックリン美術館などで作品を発表。アルゼンチン出身の女性画家20名によるプロジェクト「PintorAs」（「女性画家」の意）の共同創設者でもある。

《CSH#14_Utopia》展示風景　Galería Agustina Ferreyra、プエルトリコ　2015
Courtesy of the artist and Galería Agustina Ferreyra, Puerto Rico

追加情報



中村 裕太
NAKAMURA Yuta

1983年東京都生まれ／京都府拠点

陶芸専攻の学生時代より「民俗と建築にまつわる工芸」という視点から、タイル、陶磁器などの研究と作品制作を行なう。作品は詳細なリサーチをもとに制作される。収集したタイル片や陶片を関連資料とともに展示、また建築の一部として再構成することなどを通じて、かつての日本の風習、生活習慣、文化、風土が浮かび上がる。第８回アジア・パシフィック・トリエンナーレ（2015−16）、第20回シドニー・ビエンナーレ（2016）に参加。国内の主な展覧会に「六本木クロッシング2013展：アウト・オブ・ダウト―来たるべき風景のために」（森美術館、東京）がある。工芸を作り手の視点から読み解き、その制作の方法を探る教育プログラム「APP ARTS STUDIO」も運営している。

《日本陶片地図 京都府京都市東山区山崎町》　2014　photo: 表 恒匡
Courtesy of the artist

追加情報

ウダム・チャン・グエン
UuDam Tran NGUYEN

1971年コントゥム（ベトナム）生まれ／ホーチミン（ベトナム）拠点

ホーチミンの芸術大学を卒業後、アメリカに渡りロサンゼルスとニューヨークで美術を学ぶ。トランスナショナルな経験を基軸に、振り付けを加えたパフォーマンスの映像、彫刻、インターネットやスマートフォンを介したインタラクティブなドローイングなど、多岐にわたる方法で作品を制作している。自身の出自や来歴を俯瞰して捉え、ホーチミンにおける風景の変化や社会的問題などを主題とし、宗教、ジェンダー、マイノリティやディアスポラの問題、地政学的課題や都市化、産業化がはらむ諸問題などに、ユーモアをもって取り組む。色とりどりのポンチョを身にまといオートバイに乗った集団がホーチミン市内を隊列を組んで走る様に、旧ソビエトの作曲家ショスターコヴィチの楽曲に合わせることで、ライダーたちが舞い踊るように街を走るパフォーマンスビデオは、強烈な印象を与えるとともに様々な話題を喚起する。

《Waltz of the Machine Equestrians - The Machine Equestrians #12》　2012
photo: UuDam Tran Nguyen

追加情報

二藤 建人
NITO Kento

1986年埼玉県生まれ／埼玉県拠点

触れ合うことの直接性を生きる彫刻家。当初、素材と時間の相関、つまり、かたどる・置き換えるプロセスに作品の契機を求めていたが、やがて距離と時間を徹底的に切り詰めるアプローチに転換。自ら一枚の雑巾と化して、街に身体をこすりつける、全身を地面に埋めて（地球に接続）、掌のみを地表にさらす（宇宙に接続）、裸身を素材に突当てつつ、パラボラ状の彫刻をモデリングするなど、身体と世界の激しい触れ合い＝直接的な交感を重視する作品づくりを進めている。二藤は彫刻というジャンルをありあまる愛情で抱擁しつつ、打ち砕く。そこに生じる身体への負荷は、しかし、触れ合う瞬間の脱我、重力からの心理的解放によって購われるのか。また、観る者はその交感にどう立ち会うのか。問いのある彫刻である。

《反転の山》　2012　photo: 武藤滋生

追加情報

野村 在
NOMURA Zai

1979年兵庫県生まれ／東京都拠点

樹脂でできた立体に生じるヒビ、局所的な爆発によって広がる灰のカタチ、闇のなかから強い光を浴びて浮かぶモノ。野村の関心は、作為と無作為の境界に生まれる不確定な範囲を、彫刻あるいは写真という媒体を通して、精確にえぐり出すことにある。もちろんそこに生成と消滅をくりかえす自然と人為の隠喩を認めることも可能であり、深く振動するタナトスの気配を語ることも許されようが、むしろ重要なのは、緊張と弛緩のあいだの移行状態、言わば微気象の変動を、ひたすら観察・記録する野村の着想と造形である。彫刻というジャンルが宿し続けてきた可能性（時間との密接な関係と写真との親和性）を、今、更新する契機を、彼の作品のうちに見いだしたい。

個展「You can't see a whole tree, and same wave never comes」での展示風景
HARMAS GALLERY、東京　2010　photo: 加藤 健

追加情報

マチュー・ペルノ
Mathieu PERNOT

1970年フレジュス（フランス）生まれ／パリ（フランス）拠点

ペルノの作品は、歴史と社会学を背景とした政治的なアートの伝統に位置づけることができる。アイデンティティと歴史、進化と疎外といった問題について、形態的かつ分析的な広い視点に立って、シリーズで制作に取り組んでいる。それは利用され歴史の中で試されてきた写真というメディアへの、横断的で多様なアプローチとなっている。彼のシリーズの中では、交差すること、移動すること、そして移り変わりというアイデアがイメージとなって繰り返し現れる。そのアイデアは、ジプシーや移民などの被写体となった人々の放浪的で弱々しい存在によって、身体化されている。彼の作品は危機的な状況で生きている人々により体現された現代史の構図を提示する。

《Fire》　2013　photo: Mathieu Pernot / gallery Eric Dupont

追加情報

ハリル・ラバー
Khalil RABAH

1961年エルサレム（イスラエル）生まれ／ラマッラ（パレスチナ）拠点

ヴィジュアル・アーティストであり、2005年に始まったリワク・ビエンナーレ（ラマッラ、パレスチナ）のアーティスティック・ディレクターも務める。ラバーは、美術と建築における経験と、その両方を土台とする理論的な枠組をもとにして、構造、空間、そして空間の配置に見られる政治性について、作品を通して考察している。「The Palestinian Museum of Natural History and Humankind」（パレスチナ自然史人間博物館）という現在進行形プロジェクトに2003年より取り組む。主にヨーロッパ、中東、アメリカで多数の個展およびグループ展に参加。また、サンパウロ、シドニー、光州、イスタンブール、ヴェネツィアといったビエンナーレにも出品している。

《The Palestinian Museum of Natural History and Humankind, Newsletter》
2003−2011　Courtesy of the artist

追加情報

ナターシャ・サドゥル・ハギギャン
Natascha SADR HAGHIGHIAN

1968年ザクセンハイム（旧西ドイツ）生まれ／ベルリン（ドイツ）拠点

インスタレーション、オンライン上での介入、またリサーチベースのプロジェクトを通して、表象の政治性を問いただす作品を発表している。自然科学、美学、そして歴史の語りが持つ複層的な含意を指摘しながら、ハギギャンは社会や制度の構造が持つ複雑な政治的側面を明るみにしようとする。国内外で幅広く作品を発表し、主な展覧会に「The Spiral and the Square: Exercises in Translatability」（Bonniers Konsthall、ストックホルム、2011）、「De Paso」（Capella MACBA、バルセロナ、2011）、ドクメンタ13（カッセル、ドイツ、2012）がある。

《Früchte der Arbeit (Fruits of One's Labour)》展示風景　Johann König、ベルリン
2009　Courtesy of the artist and KÖNIG GALERIE

追加情報

佐々木 愛
SASAKI Ai

1976年大阪府生まれ／大阪府拠点

土地固有の神話や物語あるいは詩文から着想を得て、山の稜線や樹林、鳥などをシンプルな形象で色鮮やかに描き出すドローイングや油画で知られる。また、優れた挿絵画家としても活躍している。平行して、ロイヤルアイシングという砂糖細工技法による壁画制作を各地で展開。白一色のうちにいっそう単純化され、また緻密に反復される形象の編み目は、観る者を深く包み込む。食材の醸す親しみと象徴性に装飾性も加わり、一種儀礼的な静謐さを湛える作品群である。モエレ沼や六甲山、クレマチスの丘など、緑豊かなエリアでの展示も多いが、都市部のスペースに純白の壁画や軽やかなドローイングを設置することで生じる日常の変容、記憶のなかの風景との出会いも、佐々木の展示の大きな特徴・魅力である。

《ここからのその先》「もうひとつの森へ」メルシャン軽井沢美術館　2009
photo: 山本 糾

追加情報

佐藤 翠
SATO Midori

1984年愛知県生まれ／愛知県拠点

佐藤の絵画ではその多くが、閉ざされた部屋のクローゼットのような場所を想定しており、奥行きや立体性をはらみつつ、靴や衣装などのモチーフが装飾的に展開されている。水平線と垂直線によって区分される明解な空間性の中で、細部の一つ一つが独立していて際立ち、色と線、そして筆触に還元されている。鑑賞者の視線を部屋の内部へと誘い込んでいくような巧みな構図と構成を持ち、室内的な濃密さを持った眩惑的な色彩のタペストリーを作り出すことに成功している。

《Camellia closet Ⅰ》《Camellia closet Ⅱ》展示風景
「『絵画を抱きしめて Embracing for Painting』ー 阿部未奈子・佐藤翠・流麻二果 展」
資生堂ギャラリー、東京　2015　photo: 加藤 健　Courtesy of Koyama Art Projects

追加情報

関口 涼子
SEKIGUCHI Ryoko

1970年東京都生まれ／パリ（フランス）拠点

作家、翻訳家。「ふたつ以上であること」をテーマに、アイデンティティの「唯一性」から言葉を自由にすることを目指す。フランス語と日本語の双方向への翻訳、二カ国語（フランス語とクレオール語、フランス語とダリー語など）からの翻訳、フランス人翻訳家との二人での共同翻訳など翻訳の概念を広げる仕事の他、フランス語と日本語二カ国語での執筆、文学、マンガ、料理など複数のジャンルにまたがる著作活動を行う。アーティスト、デザイナー、作曲家とのコラボレーションも多い。近年は、「文学ケータリング」として、「文学」と「味」を結びつけるワークショップ、パフォーマンスとしてのテーマディナー、味に関する文学作品の翻訳などを行っている。

「100の食材、30品のディナー」でのパフォーマンス風景　ヴィラ・メディチ、ローマ
2014　Courtesy of the artist

追加情報

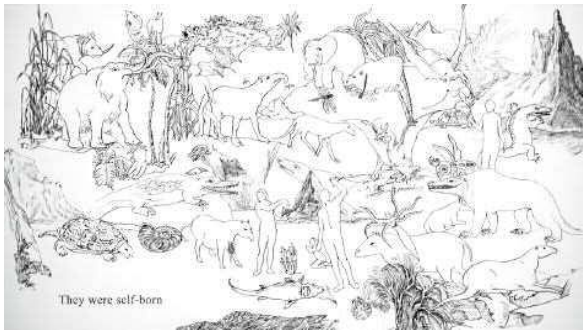
柴田 眞理子
SHIBATA Mariko

愛知県生まれ／愛知県拠点

彼女が作る多くの作品は、器や瓶といった陶芸としての基本型を踏襲しつつも無国籍で抽象的である。その側面には窓のようなスリットがあいていて、光や空気を通すような開かれた構造となっている。そして、通常の磁器より低温で焼成されているために柔らかなイメージを与える。こうした実験的な形と、華奢な印象を与える作品をさらに魅力的なものにしているのは、絵画的とも言える表面であろう。古い転写紙を絵柄に利用しながらも、その時代性を希薄にするために、あるいは古色を与えるために、さらに重層的に手を加えている。

《華の静物 009-5》　2009　photo: 怡土鉄夫

追加情報



ソン・サンヒ
SONG Sanghee

1970年ソウル（韓国）生まれ／ソウル（韓国）、アムステルダム（オランダ）拠点

韓国の中流家庭に生まれ何不自由なく暮らす一般的な女性であるという彼女自身の社会的立場を立脚点とし、よい娘、よい母、よい妻を演じることを強要される韓国社会における女性に対する集団的強迫観念や倫理観のようなものをひとつのシステムと捉え、その既成の状況を疑うことから作品を生み出している。また、いわゆる大文字の歴史には描かれることのないマイノリティや社会的弱者とされる人々の視点から歴史を再構築し、埋もれてしまう声を届けることを試みる。ギリシャ神話を下敷きとして、人間、プレシオサウルス、クジラという創生生物の恋愛物語という形式を援用することで、グローバル化の諸問題と資源獲得のために起こる自然破壊や争いの悲劇を美しく描きだした作品《The sixteenth book of Metamorphoses The love story of Khora, Plesiosaurus & Leviathan》で2008年に第9回エルメス財団美術賞を受賞。

《The sixteenth book of Metamorphoses The love story of Khora, Plesiosaurus & Leviathan》　2008　Courtesy of the artist

追加情報

多田 友充
TADA Tomomitsu

1979年広島県生まれ／日本拠点

油彩、アクリル、パステル、色鉛筆、ボールペンなど、多様な画材を用い作品を制作する。ドローイングが根っこにあるという本人の言葉通り、多彩な描線を基軸にしつつ、作品においては生と死、存在するということ、孤独、静けさ、光、色そしてナンセンスなど世界の全ての事象の断片を出現させることを試みる。近年は、白亜地による重層的かつ透明性の高い下地の上に、独特な質感を備えた規模の大きな作品にも取り組んでいる。また具象的・抽象的なモチーフに加え、言葉なども交えることが多く、根源的で象徴的な作品世界を築いている。

《たくさんのたましい》　2014　photo: 三嶋一路　Courtesy of ARATANIURANO

追加情報

田島 秀彦
TAJIMA Hidehiko

1973年岐阜県生まれ／岐阜県拠点

田島は通常であれば、ほとんど意識されないような産業用の装飾タイルの絵柄を参照しながら、平面や立体作品の制作を行ってきた。彼のこうした作品は、歴史的にタイル産業の強いこの中部地域に生まれてきた名もなき近代タイルのデザイン意匠を、絵画平面を通して復権させるささやかな試みにも見える。一方で、こうしたデザイン意匠が持つ非地域性と非歴史性が強調されることで、田島の作品はどこの国の美術でもない、逆にどこの国でもあり得るような、無国籍で装飾的な平面や空間を作り出す可能性を秘めていて、それが大きな魅力となっている。

《窓から部屋へ》　2013　© Hidehiko Tajima, Courtesy of KENJI TAKI GALLERY

追加情報

高橋 士郎
TAKAHASHI Shiro

1943年東京都生まれ／東京都拠点

造形作家。当時として極めて先進的であったコンピューター制御によるアート作品「立体機構シリーズ」を大阪万博EXPO'70など多くの展覧会で発表した後、風船を素材として扱った「空気膜造形シリーズ」を考案、世界各地で展開し、芸術の分野にコンピューターやテクノロジーを浸透させた立役者の一人として知られている。同時に多摩美術大学でデザイン研究を先導。イスラム紋様の研究では世界的に知られ、独自の教育思想を発表する一方、多摩美術大学学長も務めるなど、芸術・研究・教育にわたり活躍を続けている。

《レイモン・ルーセルの実験室》　2014　photo: 港 千尋

追加情報

竹川 宣彰
TAKEKAWA Nobuaki

1977年東京都生まれ／東京都拠点

彼自身のアイデンティティや立ち位置を起点とし、現在の社会や政治の渦中にある問題を考察し、平面、立体、インスタレーションなど多岐にわたる表現方法により制作に取り組んでいる。誰しもにあてはまるような包括的でシリアスな問題を主題の軸としながらも、そのモチーフは、牛乳パックや虫歯など竹川ならではのセンスとユーモアに富んだものだ。また絵画表現を根底に据えつつ、蝉の生涯と人類の歴史を重ねたり、貝やナマコなどの生物の観察を通して海や航海など壮大な旅と創造の軌跡を辿るなど、人間中心的な思考と距離をとるユニークな立ち位置から、西洋美術とアジア的な表現との新たな関係を構築しようと試みている。

《We are Pirates of Uncharted History》展示風景　第12回リヨンビエンナーレ、リヨン現代美術館　2013　Courtesy of Biennale de Lyon

追加情報

田附 勝
TATSUKI Masaru

1974年富山県生まれ／東京都拠点

トラックとドライバーを撮影した写真集を、2007年に『DECOTORA』として刊行。2006年から東北地方で撮り続けた写真集、『東北』を2011年に刊行。「東北では動物と人間が近いところにいる」そして「生と死とが深く結びついている」、と田附は記す。2012年に東北での鹿猟を撮影した『その血はまだ赤いのか』を刊行。2013年には東北の闇の中の鹿を撮影した『KURAGARI』、そして2014年には鹿猟そのものの終わりを告げる『「おわり。」』を刊行。2014年から2015年にかけて八戸の漁村をテーマに「魚人」と題して彼らの漁と生活を撮影する。撮影する対象との関係性に独特のものがあり、そのことが彼の作品に魅力を与えている。

《鹿撃たれる》岩手県釜石市2009年11月　2009
Courtesy of the artist and GALLERY SIDE 2 copyright Masaru Tatsuki

追加情報

寺田就子
TERADA Shuko

1973年大阪府生まれ／京都府、岐阜県拠点

寺田は日常に溢れる透明・反射素材の器や文具、遊具を組み合わせながら、淡い光が細やかに行き交い、抑制された色彩が照り映える奥行き豊かな空間を創りだす。その小さきものへの愛着は、幼い日々の遊戯のような、親密な世界への無条件の没入を思いださせて懐かしい。また、構成の中心やアクセントとして登場する球形や円形が、作品全体に架空宇宙の縮減模型のような印象を授けていく。もちろん作品の核心は、幼少期の空想との近似ではない。むしろ重要なのは、寺田の制作が、今日可能なひとつの感受性の呈示となっている点である。作品の微細さは、その分、私たちの預かる空間の広がりでもある。その気づきこそ、彼女の作品にふれる喜びである。

《透明な気配》　2015　photo: 大須賀信一　Courtesy of GALLERY CAPTION

追加情報

ウェンデリン・ファン・オルデンボルフ
Wendelien VAN OLDENBORGH

1962年ロッテルダム（オランダ）生まれ／ロッテルダム（オランダ）拠点

彼女のリサーチは数々の社会的な問題へと向けられており、映画とインスタレーションを通して、さまざまなレベルで公的な層を研究している。ファン・オルデンボルフの映画は公共のスペースで撮影されることが多く、台本もしばしば一般参加者との協同により書き進められる。こうした実践そのものがプロジェクトの最終形態に絶えず影響を及ぼすことになる。近年では、キエフ・ビエンナーレ（ウクライナ、2015）、Van Abbemuseum（アイントホーフェン、オランダ、2014）、第54回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2011）、第4回モスクワ・ビエンナーレ（2011）、第29回サンパウロ・ビエンナーレ（2010）、第11回イスタンブール・ビエンナーレ（2009）などに参加している。

《From Left To Night》展示風景　The Showroom、ロンドン　2015
photo: Daniel Brooke

追加情報

ディレク・ウィンチェスター
Dilek WINCHESTER

1974年イスタンブール（トルコ）生まれ／イスタンブール（トルコ）拠点

ウィンチェスターは、翻訳、文学、言語、演劇、オーラルヒストリー（口述の歴史）や感情表現を主題に制作している。最近はアルファベット表記の問題に取り組んでおり、トルコにおけるアルファベット表記の改訂や文学的古典に関心を寄せている。とりわけ、19世紀以降作られた、カラマン語（トルコ語をギリシャ文字で表記していた正教徒たちの言語）とアルメニア・トルコ語で書かれた書物に注目している。これまでにSalt Beyoğlu、Spot Production Fund（ともにイスタンブール）や「Home Works 6」（Ashkal Alwan、ベイルート、レバノン、2013）などでの展覧会に参加。また個展にギリシャ国立現代美術館（アテネ、2012）がある。

《Geometry of Life》展示風景　個展、ギリシャ国立現代美術館、アテネ　2012
photo: Marili Zarkou

追加情報

山田 亘
YAMADA Ko

1964年愛知県生まれ／愛知県拠点

名古屋を拠点に国内外で活動。アメリカでアートを学んだ山田の活動は写真をベースに、多彩なメディアの様式を活用し、その表現の可能性を問う。今回はベルリンや大阪市の西成などで展開されてきた「なるへそ新聞」の活動を愛知県で展開する。彼の「なるへそ新聞」では、紙面は街と見立てられ、建物が解体されて空き地となり、そして新たな建物が作られるという都市空間のサイクルと同じように、号を重ねる毎に部分的に記事が差し替わっていく。コミュニティのオーラルな歴史をすくい上げ、その情報を新聞という古典的な現在進行形メディアを通してみることで、町には新たな交流と会話が生まれていった。町の中で新聞社編集部を運営し、参加を希望する記者達とともに町の人々に取材し、会期中、新聞を作り配布する予定。

《西成なるへそ新聞》　2013　Courtesy of the artist

追加情報

[アーティスト派遣事業]

オスカー・ムリーリョ（現代美術）による「frequencies プロジェクト」を県内小学校（4校）で実施します。これまでにコロンビアやインドなど多くの国で実施されている長期的なプロジェクトで、子どもたちの持つ創造性や教室内の自由な雰囲気を記録します。他、3名のアーティストによるアーティスト派遣事業を実施する予定です。

「frequencies プロジェクト」について
≫ **http://frequenciesproject.net/#/**

「フリークエンシーズ・プロジェクト」より展示風景
第56回ヴェネツィア・ビエンナーレ　2015　photo: Maris Mezulis
Courtesy of the artist and David Zwirner, New York / London

追加情報

[モバイル・トリエンナーレ]

参加アーティストの、トリエンナーレ本展とは異なる作品で構成されたモバイル・トリエンナーレが8月～9月の週末に愛知県内各地の会場に移動します。

- **設楽町田口特産物振興センター〈設楽町〉**
北設楽郡設楽町田口字向木屋3－1

愛知県の北東部に位置する人口約5,300人の町の中心地に建つ施設。設楽町の林業、農業の振興と地域活性化のため、特産物の展示・販売や講演会等が開催される。

- **大府市勤労文化会館〈大府市〉** 大府市明成町1－330

知多半島の北端に位置する人口約9万人の都市の文化芸術を担う施設。市の芸術祭や音楽祭などの舞台公演や、成人式が行われるホールと会議室や研修室、宿泊設備を備え、多くの市民や企業に利用されている。

- **一宮市博物館〈一宮市〉** 一宮市大和町妙興寺2390

愛知県の北西に位置する人口約38万人の都市の郷土の歴史や文化遺産を伝える博物館。長嶋山妙興報恩禅寺の境内に隣接した、内井昭蔵による特徴的な建築。

- **安城市民ギャラリー〈安城市〉** 安城市安城町城堀30

愛知県の中央部西に位置する人口約18万都市の展示施設で、安城松平4代の居城を整備した城址公園に面した建物。埋文センターを併設し、歴史博物館・安祥公民館が隣接する文化ゾーンに位置する。

追加情報